九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学百年史 第7巻 : 部局史編 IV

九州大学百年史編集委員会

https://doi.org/10.15017/1801803

出版情報：九州大学百年史. 7, 2017-03-31. 九州大学
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

第 34 編

総合研究博物館

第 1 章　総合研究博物館の創設

第 1 節　理念と設置目的

九州大学には、開学以来の研究と国内外の調査によって収集された 750 万点を超える学術標本があるが、各学部・大学院研究科、各研究施設で個別に保管されてきた。近年、分析技術の向上により、実証的研究を行う上で学術標本の利用要請が高まっており、分野横断的な研究に学術標本の重要性が認識されてきている。また、「理科離れ」や「モノ離れ」対策として、学術標本を用いて学生に知的刺激を与える実物教育が必要となってきている。博物館は部局・分野横断的に標本の保存と未来への継承を図り、統一したシステムの下で標本およびデータの提供を行い、学部教育・大学院教育・研究への学術標本の多角的・効率的有効活用を図る大学組織としての機能を持つ。

博物館はまた、大学と社会の接点となる施設であり、大学が行っている教育・研究の成果を社会に紹介し、社会の大学への要望を受け取る窓口としての機能を持つ。学術標本や情報の一般公開を通じて、地域の行政や他の博物館と密接に連携しながら、社会教育・生涯学習を支援し、社会に貢献する博物館であることも理念とする。

第 2 節　創設の経緯

九州大学には、1911（明治 44）年の創設以来、教育・研究の成果として大量の学術標本・資料が蓄積されてきた。しかし、整理・保存のための施設・設備が不十分で、標本・資料を効率よく活用し、新たな研究を効率的に再生

産するという理想には程遠かった。そのため 1971（昭和 46）年に九州大学総合研究資料館新設構想の検討が開始されたが、実現に至らなかった。

1995（平成 7）年 6 月に、学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会が「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について（中間報告)」を提出した。これを受け主要国立大学で大学博物館の設置が計画され始めた。九州大学では 1996 年 6 月に文部省で説明を行い、同年 7 月に総合研究博物館構想検討専門委員会が設置された。同委員会は、それ以前から存在した総合研究資料館・大学文書館・博物館の 3 構想を一本化するかたちで、「九州大学ユニバーシティ・ミュージアム構想」を提出した。同年 12 月に九州大学ユニバーシティ・ミュージアム設置準備委員会（委員長・杉岡洋一総長）が組織され、その下に設置した専門委員会（委員長・志垣嘉夫設置準備委員会副委員長）で、先行小規模展示企画や、1998 年度概算要求に向けた構想素案作成を進め、1997 年 5 月からは文部省のヒアリングが始まった。大学博物館の必要性を内外に訴えるため、福岡市博物館で、1997 年 6 月に「倭人の形成」、1998 年 6 月に「雲仙普賢岳の噴火とその背景」、1999 年 6 月に「九州大学・医学の歩み―寄生虫学の展開と医の文化」という 3 回の先行展示を開催した。1998 年 10 月から 2000 年度概算要求に向けた準備を始めた。1999 年 6 月に九州大学総合研究博物館（仮称）新設の 2000 年度概算要求を行い、教授 2・助教授 3・助手 2 で 3 系からなる博物館の新設を要求した。同年 7 月に名称が「九州大学総合研究博物館」と決まり、12 月には事務担当部局、3 系の名称などが決まった。2000 年 1 月に総合研究博物館新設の予算内示があり、諸施設の仮設場所が決まった。3 月に振替分教員 5 名が決まり、純増分教員 2 名は設置後の公募となった。規則が定まり、館長候補者を選考した。

第 2 章　組織運営と人事

第 1 節　組織運営

組織は館長（規則第 4 条）、副館長（第 5 条、2009 年 4 月～）、専任教員および関係部局の協力による兼任教員（第 11 条）を置く。博物館の重要事項を審議するため運営委員会を置く（第 6 条）。専門的事項を審議するために運営委員会に必要に応じて専門委員会を置く（第 10 条）。博物館の目的達成のため、一次資料研究系・分析技術開発系・開示研究系の 3 系を置き（第 3 条）、専任教員はどれかに所属する。また内規で、学術標本の管理・運用にあたる資料部、野外における教育・研修支援のためにフィールド・ミュージアム部を置き、ともに専任教員・兼任教員で構成する。博物館事務は当分の間、理学部等事務部が担当する。

第 2 節　主要人事

2000（平成 12）年 4 月の創設時の職員は、湯川淳一館長・松隈明彦教授・中牟田義博助教授・中西哲也助教授・宮崎克則助教授・楠本美智子助手・城戸義典専門職員である。同年 11 月に岩永省三教授・小島弘昭助手が着任。2002 年 4 月に三島美佐子助手が着任。2004 年 3 月に湯川館長が定年退職、4 月に村江達士館長・都筑健二専門職員が着任。2005 年 3 月に楠本助手が停年退職。2006 年 3 月に村江館長・都筑専門職員が定年退職、4 月に嶌洪（しまひろし）館長・木下隆司専門職員が着任。2007 年 3 月に嶌館長が定年退職、小島助手が東京農業大学へ転出、4 月に多田内修館長が着任。2008 年 1 月に丸山宗利

図 34-1 2000 年の創設時の博物館玄関にて
前列右：杉岡洋一総長、前列左：湯川淳一初代館長。

助教が着任。2009 年 3 月に多田内館長が退任、4 月に松隈明彦館長が着任。2010 年 3 月に宮崎准教授が西南学院大学に転出、4 月に木下専門職員が退職、笠敏治専門職員が着任、7 月に笠専門職員が転出、10 月に三島助教が准教授に昇任。2011 年 3 月に松隈館長が退任、4 月に竹田仰（たかし）館長が着任、5 月に舟橋京子助教が着任。2012 年 3 月に松隈教授が定年退職、8 月に前田晴良教授が着任、12 月に松本隆史助教が着任。2013 年 3 月に竹田館長が停年退職、4 月に吉田茂二郎館長が着任。2015 年 4 月に米元史織助教が着任。

第 3 節　組織整備と将来構想の模索

当館の歴史のうち組織整備と将来構想の模索を中心に記述する。

2000（平成 12）年 4 月に総合研究博物館が設置された。その時点の職員は館長・専任教官 5 名・事務官 1 名であった。2001 年度概算要求では、事務系要員・施設設備費の要求は保留となった。2001 年 3 月に「新キャンパス・マスタープラン」にタウン・オン・キャンパスの中心機能を担う拠点として博物館の位置付けが明記された。2002 年 11 月に「新しい大学博物館を考える会」を発足させ、2003 年 3 月までに 6 回開催し、4 月に同会からの答申書が出され、社会貢献が強く要請された。

2004 年 3 月に有川節夫副学長から「福岡市からみた九州大学総合研究博物館構想について〈地域共有施設としてのコミュニケーションミュージアム構想（案)〉」が伝達され、館の意見を求められた。博物館は展示・公開・催事・社会教育機能のみを持ち、学芸員は置かず、職員は企画・運営・渉外・事務のみ行うというもの。館内で問題点を検討し、「九州大学総合研究博物館が有する主要機能」をまとめた。5 月に有川構想に対して「九州大学博物館コミュニケーションミュージアム―地域に根差した大学博物館を目指して―」を作成した。9 月に村江館長が館の改組案―従来の機能を研究部で行い、地域連携・社会貢献担当の事業部を新設する―を提案した。10 月に有川副学長が福岡市副市長・移転推進対策部長と面談し、市担当者の博物館視察が実現した。11 月に村江館長の改組方針が博物館運営委員会で承認され、館長が文科省の担当官と面談した。2005 年 3 月には改組概算要求の準備を行った。3 月に自己点検評価を行って報告書を刊行し、12 月に外部評価委員会を開催し、2006 年 3 月に外部評価報告書（2000～04 年度）を刊行した。財政・設備状況・事業部構想・大学の博物館に対する対応・総合評価が C 評価、施設状況が D 評価であった。

2008 年 6 月から 9 月にかけて多田内館長の提唱で将来構想検討会を実施した。10 月に「5 年目評価、10 年以内組織見直し」制度が始まり、12 月にヒアリングが実施され、2009 年 8 月に「伊都地区への移転を契機として、九大の「総合」博物館としてのビジョンを提示すること」との評価結果が通知された。10 月に第 2 回ヒアリングが実施され、2010 年 2 月に結果が通知された。改善意見への対応が十分でなく、将来構想（組織の改編計画）を再考せよという 4 段階中最下位の評価であり、具体的意見は、①収蔵品の展示について外部機関との連携なども考慮しつつ、積極的に取り組む必要がある、②伊都地区への移転について、具体的なビジョン（建物の規模・展示等）を明確にし、学内外の理解および協力・支援を得る必要がある、であった。評価結果に基づく将来構想と進捗状況報告書の提出が義務付けられたため、

2010 年 3 月から理事・企画部・施設部と面談し、将来構想再考のための対策を始めた。3 月に第 3 回ヒアリングが実施され、6 月に結果が通知された。「九州大学の総合研究博物館としてのビジョンを明確にし、福岡市・企業・市民等の理解が深まる工夫を凝らし、新しい博物館の建設にかかる資金確保のための啓発活動に組織を挙げて取り組む必要がある。」という意見に十分留意をしつつ計画を実施してよいというものであった。

この結果を受けて、企画部から今後の活動計画・プロモーション DVD 製作を求められた。DVD の CG 版製作のための建物構想について建築学教室に協力を依頼し、2010 年 6～7 月に院生による実習が実施された。7 月に企画部からプロモーション経費が認められ、活動を始めた。その後 2011 年は DVD 実写版・CG 版の製作を継続し、2012 年 6 月に DVD が完成した。

この間、2010 年 12 月に自己点検評価を行って報告書を刊行し、2011 年 2 月に外部評価委員会を開催し、8 月に外部評価報告書（2005～09 年度）を刊行した。研究・国際連携・施設状況・設備状況・事業部構想が C 評価であった。

2013 年 9 月に組織の拡充を目指し、活性化制度に「デジタルメディアセンターの新設」で申請し、11 月に審査結果が通知され、34 申請中 32 位であった。

2014 年 4 月に「5 年目評価、10 年以内組織見直し」制度による評価の実施が通達され、7 月に組織改編計画等報告書を提出した。9 月に書面評価における評価コメントが通知され､「学内及び市民に強烈にインパクトを与える方策が必要」､「恒久的建物の実現にあたって財源の確保をはじめ幅広い学内外の支持を集める活動が必要」､「学内他部局とのさらなる連携強化が有効」､「国立博物館や市立博物館との連携を考え、職員のクロスアサインメントなども利用した地域における博物館構想もあるべき」､「コアになる施設や人員の確保が重要」などの意見があった。10 月にそれら意見を受けた補正資料・プレゼン資料の提出、11 月に資料の再提出を行い、12 月にヒアリングが実

施された。

この間、2014 年 7 月に有川総長から博物館の将来構想を検討する全学委員会の立ち上げのために部局長懇談会での説明を要請され、9 月に「大学移転事業における博物館の現状と課題―全学的な標本・資料保全体制の必要性―」として説明した。12 月に久保新総長の現状視察があり、全学委員会設置準備開始の指示があった。

2014 年 10 月に活性化制度にかかる改革計画書『総合研究博物館組織の改編』を提出し、12 月に審査結果が通知され、37 申請中 29 位であった。なお 2015 年 12 月に、2016 年度から当館は活性化制度の対象外となったと通知された。

2015 年 2 月に「5 年目評価、10 年以内組織見直し」制度によるヒアリング意見等の概要が通知され、「収集・保存すべき資料・標本の選別、基準作成、を行う必要がある」、「標本・資料を重要度別に整理する」、「伊都への移転に際し、限られた予算の中で、規模を検討する必要がある。その 1 つとしてスマート・ミュージアム構想は良い」、「次世代型ミュージアムの検討状況を関係者に伝え議論を深めよ」などの意見があった。7 月に評価結果が通知され、「博物館で収集・保存する資料・標本の収集・保存ポリシーを客観的な観点から、急ぎ作成・明示すること。その上で、収集・保存する資料・標本の数量の精査、それらの保全と移転についての方針等を明示すること。」であった。

2015 年 3 月～9 月に、全学委員会立ち上げのための館長と理事との面談、委員会の目的・構成の検討を行った。10 月に企画専門委員会の元に WG を作ることが決まり、11 月に企画部と相談し、12 月に企画専門委員会に WG の設置を諮り承認された。今後、ミッションの再定義・再確認、収蔵・展示方針の検討を全学的に行っていくことになる。

第 3 章　施設と収蔵品

第 1 節　施設設備充実への努力

総合研究博物館は創設以来今日まで、独自の建物をもたず、箱崎地区内の既存施設を借用している状態に変化はないが、収蔵庫はじめ博物館活動に必要な施設の拡充・獲得の努力をしつつ、将来の建物建設・移転を目指し様々な努力を重ねてきたことから、その軌跡を記述する。

博物館施設の場所については、設置準備段階には、元岡地区か福岡市中心部か箱崎地区か議論があったが、1998（平成 10）年に、移転を控えて当面は箱崎地区の既存施設を利用することに落ち着いた。

2000 年 4 月の設立時には、教員居室は旧印刷所（122m²）、実験室は旧法文系建物（50m²）、展示室は 50 周年記念講堂ホワイエ（50m²）であった。12 月に記念講堂 3 階の 2 室（73m²・48m²）が展示室に加わり、総面積 343m² となった。2002 年 2 月に総長裁量経費で展示ケース 15 台・展示台 20 台・標本保管庫 8 本・吊り下げパネル 44 枚を購入し、記念講堂 2・3 階に設置した。2002 年 11 月に湯川淳一館長名で「新キャンパスセンター地区基本設計にかかる要望について（依頼）」を新キャンパス専門委員会委員長あてに提出し、12 月にセンター地区コア会議に博物館の早期移転要望書を提出した。

2003 年 2 月に先の「要望について（依頼）」を総長に提出し、博物館の面積として「全学面積利用」の施設としての検討を依頼した。4 月頃から箱崎地区における博物館諸施設の獲得要求のための準備を始め、11 月に「博物館の標本収蔵室及び研究室の確保について（緊急的要望）」、12 月に「総合研究博物館活動のための箱崎地区での建物の暫定的確保について」をまとめ、2004 年 2 月に提出し、工学部の伊都への移転を控え、空き建物の借用を要

請し、工学部 5 号館・応用化学建物を候補に挙げた。4 月に医学部・基礎研究A棟の改修工事に伴い古人骨資料の大学院比較社会文化研究院から博物館への移管が打診された。6 月に記念講堂 4 階小会議室（72m²）の使用が認められた。

2005 年 5 月には「工学系の新キャンパスへの移転後における工学部列品室継続利用の要望について」を提出した。8 月に古人骨・獣骨資料の移転先として施設部から旧知能機械工場 2 階が提示され、理事から承認された。9・10 月に古人骨・獣骨資料の 2 階への移転作業を実施した。

2006 年 2 月に旧知能機械工場 1 階の空き部屋を整備・活用すべく「総合研究博物館の過渡的施設整備について（要望）」を提出した。5 月に骨格標本室を一般公開し、1 階の 2 室でもそれぞれ展示を実施した。

2007 年 1 月に、六本松地区の移転に伴い図書館の玉泉館考古学資料を博物館に移管することが決まり、受け入れ準備を始めた。2 月に「総合研究博物館に関わる特殊事情によるスペースの確保について（依頼）」を提出し、工学部の移転に伴い 3 号館建物に教員研究室・実験室・標本庫（計 740m²）を借用する要望を行った。3 月に箱崎地区共通施設利用検討チーム会議で、旧工学部本館（以下「本館」）の 1～3 階の 596m² の使用が認められたため、部屋の利用計画を作り移転準備を始め、夏季に移転し 10 月から使用開始した。

2008 年 1 月に本館 4 階会議室の管理が当館に移された。1 月に「平成 20 年度九州大学開学記念日およびその後の展示公開に伴う旧工学部本館講義室等の展示室への改修にかかるお願い」を提出し、本館 3 階 9 番講義室等の展示室への改修費用捻出を依頼し、2 月に条件付きで認められた。2 月に旧知能機械工場（第一分館と命名）1 階に考古学資料を搬入した。3 月に本館 9 番講義室の展示室（常設展示室と命名）への改修工事を行い、5 月から一般公開を開始した。9 月に第一分館 1 階に六本松地区から玉泉館考古学資料を搬入した。

2009 年に本館 3 階の標本収蔵室が早くも満杯になったため、2010 年 2 月

図 34-2 旧工学部本館 3 階の常設展示室

に「総合研究博物館に関わる特殊事情によるスペースの確保について（依頼）」を提出し、5 室計 197m^2 の追加使用を希望したが実現しなかった。9 月から標本資料の移転先の学内調査を開始し、筑紫地区に問い合わせた。

2011 年 9 月に「大学移転に伴う学術標本の保管に関わる大学博物館スペースの確保について（依頼）」を作成し、学術標本が箱崎に残置され保管場所が確保できない場合の諸事態を危惧し、筑紫・大橋・病院地区での暫定的収蔵室（計 4250m^2）の使用を希望した。

2012 年 7 月に施設部から、伊都ウエスト地区に 4000m^2 のプレハブ収蔵施設を作る計画があることを連絡された。8 月に「大学移転に伴う学術標本の保管に関わる大学博物館スペースの確保について（依頼）」を提出したが、後に他キャンパスには空き建物がないとの回答を得た。また「博物館活動の充実に必要な旧工学部本館建物中でのスペースの確保について（依頼）」を提出し、前田晴良教授の着任に伴う標本収蔵室、テニュア・トラック教員の採用に伴う居室等で本館に 5 室を要求し認められた。さらに木製什器の保管場所として、旧機械工学実験室の貸与を希望し認められた。

2013 年 7 月に農学研究院から昆虫標本移管と整理用部屋確保の要請があった。12 月に農学部 1・2 号館、英彦山生物学実験施設、附属図書館の飽和に伴う「農学部・昆虫学教室所蔵昆虫標本の移管に伴う収納スペースの確保について（依頼）」を作成し、本館に数室の貸与を希望した。12 月に施設担当理事に博物館移転に伴う各種要請を行ったが、昆虫の緊急要求のみ一時的

に対処すると回答を得た。

2014 年 1 月に昆虫収蔵の緊急対応のために「九州大学戦略的スペース利用願い」を提出し、3 月に工学部 4 号館 2 階に 2 室を貸与された。3 月に施設部との打合せ結果に基づき「大学移転に伴う学術標本の保管に関わる大学博物館スペースの確保について」を作成し、現収蔵室面積 3468m^2 と今後の移管予定分 1919m^2 を合わせた 5387m^2 について、箱崎地区の移転完了まで収蔵室としての維持を依頼し、今後本館・大学本部建物が再活用可能になる場合、博物館が主体的に活用することを要望したが受理されなかった。3 月から第一分館の閉鎖に伴う資料移転先の確保、および理学部・農学部の移転に伴う未移管資料の移管と保管場所の確保を模索し始め、学内のみならず糸島市からの空き建物借用の必要性を認識した。4 月に糸島市経済振興部の協力で伊都国歴史博物館を視察した。5 月に統合移転推進課から正式に第一分館資料の移転を要請された。8 月に糸島市から博物館収蔵品に関する問い合わせがあり、11 月に糸島市から使用可能施設 4 か所が提示され、2015 年 1 月に視察したが、借用に至らなかった。

2015 年 4 月に本館 3 階列品室資料の工学部からの移管と部屋使用が追認された。

2015 年中の第一分館解体に伴う資料の移転は、2014 年 9 月から準備を始め、2015 年 1 月に統合移転推進課が示した個所内での移転先割り振りを決めた。7 月から移転先の改修工事を行い、10～11 月で移転を完了した。

12 月に糸島市から深江公民館が借用可能と連絡があり、現地視察の後、借用の方向で検討に入った。

第 2 節　学術標本の収蔵管理

そもそも学術標本・資料の収蔵・管理は博物館にとって最重要任務の 1 つ

図 34-3 第一分館の旧知能機械工場

である。しかし 2005（平成 17）年の旧知能機械工場の借用まで、総合研究博物館には収蔵施設がなく学術標本のまとまった移管・管理はできなかった。同工場の借用後、第一分館と命名し、2005 年に医学部から古人骨資料 2600 体・脊椎動物骨格標本 200 体、2008 年 3 月に文学部から考古学資料プレハブ 2 棟分、9 月に六本松図書館から旧玉泉館考古学資料 1 万 0245 点を搬入し、2009 年 3 月に故岡崎敬教授蔵書、2006 年から学内の歴史的什器類を搬入し、主要収蔵施設となった。なお工場に設置されていた歴史的工作機械類は旧位置のまま移管・展示した。これらのうち古人骨資料は日本人起源問題の解明に用いられた重要資料、脊椎動物骨格は希少種を含む九州有数の標本、旧玉泉館資料は旧制福岡高等学校教授・玉泉大梁蒐集、歴史的工作機械類は九大創設時の輸入品である。

2008 年 1 月に病院地区からカルテ資料 16 万冊を旧工学部 4 号館（第 2 分館）に移転した。2012 年に農学部畜産学科から移管した獣骨類を記念講堂 3 階に展示した。2014 年 10 月に旧工学部 2 号館材料強弱学教室残置の装置を移管し、旧保存図書館地下室に保管した。

第一分館の全資料（献体除く）、記念講堂の獣骨類は、箱崎地区の売却に備えた建物整理によって、2015 年 11 月に旧工学部本館地下・旧保存図書館 1 階、旧工学部 5 号館 1 階に移転し、2018 年度末まではそこで保管する。第二分館のカルテ資料は、2012 年に博物館での保管が法的に不都合と判明したことから、2013 年 3 月に九大病院への移管を決め、2015 年から病院側が保

管・廃棄の処理を進めた。現代人骨は 2014 年に理事から医学部への移動を要請されたが、結局、献体資料のみが 2015 年 6 月に医学部基礎研究 B 棟に移転した。2015 年度秋季の理学部の移転に伴う未移管資料の移管と保管場所の確保は、移転を控え博物館の資料数や面積を増加させないという大学の方針のために断念せざるを得なかった。

この間、学内外から受贈した各種標本は、当館の本拠地が 2007 年に旧工学部本館に移るまでは記念講堂か第一分館で、本館に移ってからは主として本館内の収蔵施設で収蔵・管理してきた。収蔵面積に限りがあり、比較的少量のものを選択せざるをえず、学外に流出した重要標本があったのは惜しまれる。受贈品目は、化石・植物・貝類・昆虫・動物・考古学資料・文書史料など多岐に渡るが、詳細は『九州大学総合研究博物館ニュース』（以下『ニュース』）・『九州大学総合研究博物館年報』（以下『年報』）を参照されたい。

第 4 章　展示と社会貢献

第 1 節　展　示

当館の創設以来、本拠地が旧工学部本館 3 階に移る 2008（平成 20）年までの展示施設は、記念講堂 2 階ホワイエの仮設展示場（50m²）のみであった。そのため、年に 1 度の大規模な展示は学外の公共施設を借用して開催することとした。2008 年から常設展示場が本館にできたが小規模（208m²）には変わりがなかった。このような展示施設事情から、性格と開催場所が異なる数種の展示を並行して実施してきた。以下、種別に主要なものを紹介するが、展示内容の詳細は、『ニュース』・『年報』・博物館 HP を参照されたい。

常設展示

学内の多様な標本・資料とそれに基づく研究成果を紹介するもので、2008（平成 20）年 4 月までは記念講堂 2 階で行い、同年 5 月以降は、本館の常設展示場（旧 9 番講義室）で行っている。展示品は、考古学資料、記録史料、岩石・鉱物標本、化石標本、植物標本、昆虫標本、動物標本、技術史史料などである。

平常展示

常設展示の本館 3 階への移動に伴い、記念講堂 2 階の展示を改称したもので、標本・資料紹介の性格を残し、不定期で展示替えをして、従来の九大所蔵標本や新受贈資料の紹介などを行い、2011（平成 23）年にはプロモーション DVD 製作と連動した「博物館将来構想模型展示」を実施した。2015 年度からの記念講堂 2 階閉鎖に伴い終了した。

特別展示

学内施設で行う小規模な展示であり、性格は多様なものを含み、場所も固定していない。2001（平成 13）年度には特定分野のやや専門的な研究成果のパネル展示「進化の舞台の主役と脇役」「地球惑星科学への招待」を実施したが、2002 年度からは九州大学 P&P 専門委員会との共催で P&P（九州大学教育研究プログラム・研究拠点プロジェクト）研究に採択された課題の研究成果の公開「九州大学教育・研究の最前線」を年 1 回継続的に実施している。さらに 2003 年度以降はトピック的に多様なテーマに取り組んでいる。標本・資料の紹介を主とするものでは、2011 年以降毎年昆虫のマニアックな紹介などを行っている。ほかにも、2003 年に九大と九州芸術工科大学との統合を記念し芸術工学研究院を紹介する「あれも、これも、芸術工学！？」、2004 年に出揃った大学博物館を紹介・比較する「大学博物館西東」、2012 年に人工島のアイランドシティー・アーバンデザインセンターで「たんけんみらいタウン、学んで省エネ・あそんで省エネ」、2012・2015 年にカリグラフィー創作団体スタジオポンテとの共催展示などを行った。

図 34-4 第三分館の高壮吉鉱物標本

公開展示

九大の各部局・分野の研究成果を広く公開するために、学外の公共施設を借用して年に 1 回実施する一般向けの規模の大きな展示である。博物館創設に先立つ 1997（平成 9）～99 年度の先行展示を継承し、2000 年度「森・水・

人」、2001 年度「石炭・金・地熱」は福岡市博物館で実施したが、同館の人文系の性格と齟齬が生じたため、2002 年度「植物をもっと知ろう」以降、福岡市立少年科学文化会館（以下「少文」）での開催が多くなった。以後、2003 年度「川と海の生命展」、2005 年度「自然界のなかまたち」、2006 年度「空と海ののりもの展」、2007 年度「わくわくどきどき化石のヒミツ」、2009 年度「昆虫のヒミツ」、2010 年度「人のからだ・動物のからだ」、2012 年度「FUKUOKA 子ども地球防衛隊―未来の地球を救うのはキミだ！」は少文で実施したが、2004 年度「倭人伝の道と北部九州の古代文化」は福岡市博物館、2008 年度「奴国の南」、2011 年度「九州大学百年の宝物」は九州国立博物館、2013 年度「ミュージアムバスの世界―九州大学標本・資料を魅せる―」は福岡県青少年科学館、2014 年度「ふくおかをしあわせにするデザイン」は福岡市役所、2015 年度「地球―人と自然」は本館で実施した。場所が少文でない事情は、2004・2008 年度は人文系展示であるため、2011 年度は「5 年目評価、10 年以内組織見直し」制度ヒアリングでの指摘を受け九大の学術標本を広く紹介するため、2013 年度は県立施設との連携を開拓するため、2014・2015 年度は担当部局の意向のためである。

サテライト展示

箱崎地区では集客上難があるため、当館の存在や活動を知ってもらうべく、学外数か所の施設を借用して行っている小規模な展示である。福岡空港サテライトは、福岡空港ビルディング(株)の協力により、2002（平成 14）年 10 月から第 1 ターミナル待合室に設けられた。糸島地区では、2004 年 1 月に前原市伊都文化会館にサテライトを設けたのを皮切りに、二丈町健康ふれあい施設「二丈温泉きららの湯」、志摩町総合保険福祉センター「ふれあい」に開設した。2011 年 3 月に「ふれあい」から志摩歴史資料館へ、2013 年 6 月に「きららの湯」から糸島市役所二丈庁舎に移動し、2014 年 2 月に糸島市健康福祉センター「あごら」に移した。福岡市関係では、2005 年 11 月から

福岡市保険環境学習室「まもるーむ福岡」、2012 年 3 月から西部地域交流センター「サイトピア」に設置した。

図 34-5 第三分館の動物骨格標本

巡回展示

社会連携事業「みんなで作ろうミュージアム・プロジェクト」で 2011・2012 年に実施した。同事業は次項に記す「コミュニケーション・ミュージアム事業」の後継事業で、糸島市と連携し、糸島地区での当館の認知度を高め、伊都キャンパスにおける博物館建設の機運を醸成するための事業で、標本主体の巡回展示を実施した。

博物館施設一般公開

諸般の事情から常時公開できない博物館施設を大学のイベントなどの際に短期間公開している。第一分館では 1 階玉泉館資料室・1 階旧実習工場・2 階の骨格標本室、本館では 3 階列品室・4 階旧第二会議室である。

その他の展示

2014（平成 26）年に椎木講堂オープニング展示「九州大学百年の至宝」、2015 年に椎木講堂展示「奴国の南」を担当した。中央図書館で 2014 年から「標本にみる九州大学の研究」を開始した。学外他館で実施した展示への参加として、2013 年に「大学は宝箱！―京都・大学ミュージアム連携出開帳 in 博多」（九州産業大学美術館）などがある。

第 2 節　各種催事・特別企画などによる社会貢献

博物館は施設の性格上、大学生・大学院生に対する教育のみならず、様々な催事によって社会教育・生涯学習へも関与することで社会貢献してきた。

毎年実施の催事には公開講演会があり、博物館教員および外部の研究者を講師として多様な分野の研究成果の普及に努めている。講演内容の詳細は、『ニュース』・『年報』・博物館 HP を参照されたい。公開講演会とは別に、2010（平成 22）年度から第一分館・箱崎水族館喫茶室等を利用したサイエンスカフェを実施し、科学的研究成果の普及を行っている。

2010 年には博物館創設 10 周年記念の特別企画を実施した。特別展示として「光が泳ぐ場所」「科学のえほんとハカセたち」「ツノゼミの世界展」「箱崎残像―MACHINA―」を開催した。また創立 10 周年記念フォーラム「どうする！どうなる！九大の標本資産―これからの博物館建設と運営のあり方―」を開催した。

2011 年には九州大学創立百周年の特別企画を実施した。展示は「Breating―旧工学部機械実習工場空間展示」「九州大学総合研究博物館学術標本コレクション展」「博物館将来構想模型展示」、特別企画「キオクノトビラ」として「河口洋一郎 CG 映像作品展―MORPHOGEBESIS―」「子供ワークショップ箱崎キャンパスふしぎ探し」「記憶の風景―8mm フィルム、懐かしい新しさに出会う夕べ」「Qcafe2011 ミュージアムカフェ九州大学百年の宝物語り」「エリック・サティと夢見る機械　機械工場の音楽界」「機械仕掛けの糸姫―ドグラマグラの夢が始まる―」を実施した。

これら特別企画は、展示を主体としつつも、ワークショップ、ミュージアムカフェ形式の小講演会、音楽会、演劇公演などの様々な試みを含み、従来の博物館利用者以外に当館の存在や活動を情宣する上で有効であったため、2012 年度以降も継続した。2012 年には水族館劇場との協働特別企画で展示・サイエンスカフェ・ワークショップを、2013 年には木製什器展「知春草

生」「祈りの祭典　おらしお―カラダが動けば機械も踊る―」、2014 年には「国際博物館の日」記念行事、ミニ展示「科学と芸術のはざま―金平亮三の植物描画」、2015 年には「第一分館閉館式」などを実施した。

「コミュニケーションミュージアム事業」は、2005～09 年度に、当館と九大糸島会が、九州大学を伊都キャンパスの地元に紹介し地元の理解と支援を得るとともに、大学の教職員・学生が地元を知るために実施した事業で、地域資源再発見塾・会員交流事業・ふれあいバスツアーなどを継続的に実施した。

2012 年 6 月から西鉄バスの協力による「九大ミュージアムバス」プロジェクトの準備を始め、7 月から 2013 年 3 月までバスの運行を実施し、2013 年 4 月に記録写真集『九大ミュージアムバスプロジェクト』を刊行した。

そのほか、子ども対象催事、小学校への出張展示、中学校の体験学習受け入れ、高校の SSH 研修受入れ、他大学の博物館実習への協力、シニアクラブ見学会受け入れなど多種多様な社会貢献を行っている。それらの詳細は、『ニュース』・『年報』・博物館 HP を参照されたい。

第 5 章　教育・研究

第 1 節　教　育

九大では、博物館創設以前には、学芸員資格関係授業は文学部でのみ開講していた。当館創設後、理科系学生向け授業として、理学部で 2001（平成 13）年度から 2011 年度まで「博物館概論」「博物館経営論」「博物館資料論」「博物館情報論」「視聴覚教育メディア論」を開講し当館教員が担当した。また学内での博物館実習の実施のために 2001 年 10 月に当館が博物館相当施設申請を行い 2002 年 1 月に承認され、2002 年度から理学部で「植物学標本実習」「地球惑星科学標本実習」、農学部で「動物学標本実習」を開講した。2012 年度から新課程に移行し 8 科目 12 単位から 9 科目 19 単位に増加し、新たに「博物館資料保存論」「博物館展示論」「博物館情報メディア論」「博物館教育論」が加わったのに対応し、他部局教員の協力も得ながら担当している。

学部教育・大学院教育には、各教員が関係深い学部・学府で授業を担当している。2014 年から伊都キャンパスでの基幹教育に参加し、他部局教員の協力を得つつ「博物館への招待」を開講している。また展示室・収蔵庫などの施設を、学内各部局からの依頼に応じ適宜公開するとともに、大学院統合新領域学府・芸術工学府・人間環境学府の演習・実習の場としても提供している。

野外における教育・研修支援のために館内組織「フィールドミュージアム部」があり、2008 年度に日本学術振興会の「ひらめきときめきサイエンス」事業を活用して英彦山の施設を利用した野外観察会を実施し、2015 年から農学部附属演習林の協力のもと演習林の施設・資料を活用して本格的活動を始めることとなった。

第 2 節　研　究

教員個人の研究は省略し、博物館固有の研究テーマに関わる研究を記す。P&P 研究として 2007（平成 19）～08 年度に「九州大学博物館展示を利用した実践的研究―アウトリーチ活動のあり方と、大人と子どもの関わりを促すツール開発―」（代表：三島美佐子）、2009 年度に「大学移転を活用した九州大学総合研究博物館における実践的教育プログラムの開発と推進」、2014 年度に「教育研究資料の再評価法の構築とそれらに基づく新学術領域研究」を実施した。科学研究費補助金による研究として 2010～12 年度に「学術標本 3D デジタル情報の、半自動化データ取得システム確立と VR 展示への応用・評価」（基盤研究(C)、研究代表者：三島美佐子）を実施した。博物科学会でほぼ毎年博物館に関わる研究発表を行っている。

第 3 節　出版・情報発信

定期的出版物としては、『九州大学総合研究博物館ニュース』『九州大学総合研究博物館研究報告』『九州大学総合研究博物館年報』があり、『九州大学総合研究博物館概要』・オリジナル絵葉書や展覧会図録を適宜発行している。情報発信として、2000（平成 12）年 7 月にホームページを立ち上げ、当館の基礎情報、展示・催事の案内を載せるとともに、終了した各種展示内容を「インターネットミュージアム」として公開している。また学内の標本・資料については、全学共通分間接経費の配分を受けるとともに、博物館運営経費の中にも予算を組み、資料部兼任教員の協力を得て、資料整理・データベース化を進め、順次公開している。